

人は人に感じ、人を呼ぶ

山口喜久二・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

まえがき

これまで私はジャパンローヤルゼリー（以下、J R J）の創始者として、また養蜂や代替医療の研究者としてさまざまな著作や論文を世に問うてきた。また、J R Jの社員やヘルシーパートナーに向けてたくさんのメッセージを書いてきた（ある奇特な人が調べたところ、ここ一〇年に限っても私が社内向けに書いてきた文章は原稿用紙にして五〇〇〇枚を超えるらしい）。

しかし、これだけの著作や論文を書いてきた私でも、書いてこなかったものがあつて、それが自分自身の物語、つまり自叙伝であつた。

今の世の中は、ちよつとした成功者でも「自分語り」なるものをするのが流行のようだが、そういう話は往々にして自慢話になつて、見苦しいものだ。だから、私は自叙伝を書こうと思つたことすらなかつた。

だが、その禁を破つて今回、自叙伝を書こうと思つたのはJ R Jも創業からやがて半世紀を迎えるので、当時の記録を残すのも意味があるろうと考えたためでもあるが、それと同時に、自分の来し方きかたを振り返ってみると、ここまで私が世間のために働くことができたのは自分自身

の努力というよりも、人生の要所要所で助けてくださった多数の方がいたお蔭^{かげ}で、だから自叙伝を書いてもらっても自慢話にならないだろうと気付いたからであった。

そこで本書を書き始めたわけだが、当初は手軽な本にするつもりだったのが分厚いものになってしまった。それはたくさんの方の助けによってここまで働いてこられたという話をするには、やはり人生最大の恩人である父や母の話から始めないといけないと気がついたからであった。

はたして私の人生経験がどれだけ読者の役に立つかわからないが、タイトルにあるように、「人は人に感じ、人を呼ぶ」。これだけは普遍^{ふへん}の真理であろうと思う。そのメッセージを心の片隅にでも置いていただければ幸いです。

最後になったが、本書を作るにあたってご助力をいただいた多数の皆様、そして、本書に書ききれなかったたくさんの方の恩人の皆様に深く御礼を申し上げます。

平成二十七年十一月

やまぐち きくじ
山口喜久二

目次



第一章 奇跡の生還

10

吐血／続く闘病生活／ローマ法王を救ったロイヤルゼリー／忘れかけられていた存在／東海道線に飛び乗る／ついにロイヤルゼリーを／主治医の絶句／ロウソクの火／「不思議としか言いようがない」／燃えるような希望

第二章 父母の教え

27

山口家のルーツ／バス停で待つ母／恩賜公園への「遠足」で学んだこと／「身なりを整え、話を聞く」／生まれて初めての徹夜／抗議の早退／毅然たる母の対応／分岐点／一通の手紙／「安いモノが欲しかったらよそへ行け」／関東一の名人／小遣い稼ぎは「銅拾い」／子どもの身にふさわしくない大金

第三章 二十歳の「起業」

51

友人との口論／跡継ぎ志願／鬼の形相／ニセ学生／嘘はなぜ露見したのか／文化学院に編入／売
上ナンバーワンになれた理由／「マイアミシユーズ」の看板を上げる／校庭で店開き／院長から
の呼び出し／卒業論文の始末／一〇〇年に一人のデタラメ学生／夜逃げ／地獄に仏／東京ユニフ
ォームに入社／「本日入社した山口です」／部長が腰を抜かす／バーター取引／ゴルフ会員権の
現金化を成し遂げる／胸のつかえ

第四章 徒手空拳からのスタート

85

動く店舗／半値の仕入れ／「どこの坊ちゃんだい？」／毛筆の礼状が呼んだ評判／四方山話の効
用／「いずれロイヤルゼリーは売れなくなる」／夢のような数字／「ベスト」とは逆の発想／
「もう二度と来ないでもらいたい」／大失敗から何を学んだか／「そんな馬鹿な」／出直し

第五章 転地養蜂——ハチから学ぶ

105

そのロイヤルゼリーが腐っていた理由／台湾で見た光景／新しい手がかり／目からウロコの連続
／ロイヤルゼリーの奇跡／人工王台によるロイヤルゼリー生産／ロイヤルゼリー、六つの弱点／

「君は誰だ？」／「ミツバチを飼ったことすらない連中」／驚くべき実験結果／腹案／北へ北へと向かう「旅」／五十川一族の転地養蜂に飛び込む／「ハチが傷む」という言葉の意味／巣箱のローテーションというアイデア／手製の濾過器を「開発」する／人生の不思議

第六章 ローヤルゼリー糖衣粒の開発

139

意外な人からの電話／考えるよりも動け／考えても、考えても／電話帳で見つけた錠剤会社に飛び込む／途方もなく遠い未来／世界初の耐酸皮膜付溶腸糖衣錠／「つもり貯金」／二つの提案／商品化は到底できないレベル／頭の痛い問題／「この色は天然のものか、人工のものか」／安いローヤルゼリーより高いローヤルゼリーが売れた理由／後発ニセモノ品への「先手」／「これなら誰にも真似できませんよ」／『週刊現代』編集部に飛び込む／手厳しい言葉

第七章 奇跡とは「起こす」ものである

168

新会社の船出／覚悟の訪問／嵐のような反響／資金不足の解消策／『3時のあなた』からの出演依頼／二〇〇本の電話回線が「パンク」する／たびかさなる出演拒否／意見の対立／三〇通の内容証明／厚生省からの「横槍」／絶望／薬務局の技官をうならせた画期的表現／契約養蜂を始め

る／高額仕入れの問題点／最高品質のためのコスト

第八章 人は人に感じ、人を呼ぶ

198

ファーストクラスに乗った訳／人脈を広げる、唯一の方法／一流ホテルのパーティー回り／「山口は律儀な男だ」／ある医師からの電話／行動はすべからく迅速たるべし／国立大学病院での臨床実験／驚くべき結果／ついに学会で「効果」が発表される／資金難／「日本一のローヤルゼリー屋に」／即断即決の三〇〇〇万円／糖衣粒禁止、という「情報」／陳情者たちの行列／薬務局長との面談／人は人に感じ、人を呼ぶ

第九章 アメリカでの挑戦

228

水先案内人／FDAからの製造販売許可／五〇〇人の来賓とサンキューレター／「これは並大抵のことではないぞ」／いかにして最大の難関を突破したか／一日に三万個が捌ける／ドル安という「敵」／苦渋の決断／最悪の結果／オリンピックの公認供給企業となる／アメリカのようにはならない、という直感／一三年目の決断

第十章 最高の蜜源を求めて

253

後継者不足に直面した日本の養蜂業／ミツバチがいなければ食糧危機が起きる／ミツバチを殺す農薬／台湾に活路を求めて／ミツバチは「食料」という発想／日中国交正常化による大変革／日本の養蜂業はなぜ衰退したのか／「蜂頭」杜国平氏との面談／「これはまさに桃源郷じゃないか！」／驚くべき数値／精製工場の「正体」／不可解な数値／夏の吹雪／ようやく解けた「謎」／決意

終章 次代へのメッセージ

282

中国産であることを堂々と謳う／雲南農業大学からの招聘状／日本が抱える急務／胃ガンを引き起こす「ピロリ菌」／「ヤハシ」で長寿を保つイー族の人々／シソの力／不変の価値

装丁 石間淳

写真提供 ジャパンローヤルゼリー株式会社

第一章 奇跡の生還

吐血

一九六六年四月のある朝、まだ夜明け前のことです。ひどく苦しげな父の呻き声に、私は目覚めました。

父・喜久太郎は当時、六四歳。肝臓ガンに肝硬変を併発していて入退院を繰り返していました。だが、そのような激しい呻き声を上げたのは初めてのことでした。

「これはただ事ではない——」

飛び起きて隣室のふすまを開け、あっと息を呑みました。枕もと一面、布団からシーツまで、真っ赤に血で染まっていたのです。一步遅れて部屋に飛び込んできた母も、息を呑んだまま言葉も失いました。

「お父さん！」

呼びかけましたが、父は苦しげに呻くばかりです。

——とにかく救急車だ。

震える手で一一九番をダイヤルしました。

救急車が来るまでの間、血だらけの布団で苦しむ父をどうすることもできません。焦りともどかしさで、遠くからサイレンが聞こえてくるまでの時間が、とてつもなく長く感じられました。

「浅草寺病院に運んでください」

ようやく到着した救急隊員に、まずそう伝えました。浅草寺病院は父がずっと治療を受けていた病院で、院長の大森先生が父の主治医でした。

自宅から浅草寺病院までは一〇分ほどです。到着するや、父は担架で集中治療室に運ばれ、止血処理を受けました。

当直の医師は消化器外科が専門だそうで、不幸中の幸いだったと看護婦に慰められましたが、だからといって安心することもできず、母と姉、私は診断が下されるまでの長い時間を、待合室で過ごしたのでした。

「山口さん、院長室へお越しください。診断が出ました」
ようやく呼び出されたのが朝九時頃です。

「食道静脈瘤、つまり食道の静脈に出来た血の『こぶ』が破裂したための吐血でした。止血処理はうまくいきましたが、再出血もありえます。予断を許さない状況です」
さらに大森先生の話は続きます。

「ご主人の肝臓ガンは末期まで進行しています。私たちにできるのは栄養補給と痛みを止めるくらいしかありません。余命は……長くて三カ月ほどでしょう。場合によっては、さらに死期が早まる恐れもあります。おつらいでしょうが、どうか落ち着いて心の準備をなさってください」

最悪の事態を、予想はしていました。しかしそれが現実のものとなって、私は思わず天を仰ぎました。

集中治療室に横たわる父は酸素マスクが付けられ、点滴が付けられ、喉のどにチューブを通されていました。むろん昏睡こんすい状態です。

「亡くなる前に、一度でいいから意識を取り戻してほしい……」
今まで育ててくれたお礼を、せめて言いたい。父の思いを、この耳で聞いておきたい。そう思いました。

続く闘病生活

集中治療室に担ぎ込まれた四日後、父は個室に移されました。しかし依然として昏睡状態は続いています。

病床の父の顔は、黄疸おうだん症状のため絵の具でも塗ったかのように黄色く、腹水ふくすいが大量に溜たまっているため、お腹は痛々しいほどパンパンに膨ふくらんでいます。

カテーテルという管を膀胱ぼうこうにつなげていたのですが、尿はほとんど出ません。時折、紅茶を濁らせたような尿のしずくが、ぽつり、ぽつりと落ちてきます。

吐血から一〇日しても父の意識は戻りません。ついに私は意を決して言いました。

「お父さんの友達を呼ぼう」

父には親しく付き合っている仲間が大勢いました。そのみなさんと呼んで、最後の別れをしてもらおうと、私は母に提案したのです。つまり、父はもう死ぬと、諦あきらめたのです。

「そうね。そうするのが一番ね」

母も決断したようでした。

さっそく母と姉と私で、電報を打ち、電話をかけ、みなさんに事情を知らせました。

「山口さん！……」

父の手を握ってぼろぼろと涙を流す方もいれば、真っ赤な目でしばらく父を見つめたあと、黙って一礼をする方もいました。

「何とかならねえのかい？」

諦めきれずに母に訊たずねる方もいました。

一日の見舞客は少ない日でも二〇人はいたと思いますが、あるとき父の友人に、

「息子さん、ちよつと」

と病室の外の廊下に呼び出されました。

「あんだ、ローヤルゼリーって知ってるかい？」
そう訊かれたのです。

ローマ法王を救ったローヤルゼリー

そのとき私はローヤルゼリーなるものの存在を、噂にも聞いたことがありませんでした。ですから、「知りません」と答えました。

「ミツバチが作るローヤルゼリーってものがあつてな。これをローマ法王が危篤になったときに与えたら、法王さまが元気になったそうだ。俺は、その話を雑誌で読んだ。天下のローマ法王さまが元気になったって雑誌の記事にまでなっているんだから、まんざら嘘じゃねえと思うんだ。ひとつ親父さんにローヤルゼリーを飲ませてみたらどうかと俺は思うんだが」

身内がガンになった方にはすぐにご理解いただけると思いますが、そのときの私は藁にもすがりたい気持ちでした。すぐさまそのローヤルゼリーを手に入れたいと思いました。

「わかりました。飲ませてみます。どこに行けばローヤルゼリーは買えますか？」

「いや、すまんが、俺にはわからない。ミツバチが作るものだって話だから、とにかくハチミツ屋にあたってみなよ」

ハチミツ屋なら、浅草の国際通りにたしか二軒ある——。そう思って、すぐに病院を飛び出しました。

一軒目では「取り扱っていない」という答えでした。二軒目でもやはり「置いていない」という答え。しかし二軒目の主人が親切な人で、

「養蜂家に直接訊けば何とかなるかもしれないよ。ここに日本養蜂協会の会員リストがあるから、連絡してみたらいかがですか」

と、そのリストの中から一〇軒ほど、養蜂家の屋号、電話番号、住所を抜き出した紙を渡してくれました。

忘れかけられていた存在

これはあとでわかったことなのですが、ローヤルゼリーによって甦よみがえった「ローマ法王」とは、ピオ一二世です。

一九五四年、当時八〇歳ちかい年齢だったピオ一二世が肺炎のため危篤状態に陥おちりました。

さまざまな医学的処置が施ほどこされましたが法王は回復せず、主治医のガレアジー・リシー博士が、最後の頼みの綱として、フランスで開発されたローヤルゼリーの注射薬を法王の皮下に一回三〇ミリグラム、一日三回投与しました。すると法王はわずか一カ月で回復し、以前と変わらぬ健康を取り戻しました。その翌年に開催された世界養蜂学会のセレモニーに出席したピオ一二世は、養蜂家を称たたえ、「余よはローヤルゼリーのお蔭かげで命を救われた。ミツバチと養蜂家たち

ちに感謝する」と述べられたのです。

むろんこの一件は、ビッグニュースとして世界中で報道され、当然の結果として、ローヤルゼリーのブームが巻き起こりました。

さらに同年の世界遺伝学会において、法王の主治医リシー博士がローヤルゼリーだけに含まれる10ヒドロキシ-2-デセン酸（以下、「デセン酸」と表記）という脂肪酸を発見し、さらにカナダのタウンゼント博士がデセン酸に抗腫瘍効果こうしゅようがあることを発見しました。これにより、世界各国のローヤルゼリーブームに拍車が掛かりました。

しかし日本では「ローヤルゼリーの成分は科学的に不明である」との見解を厚生省（現…厚生労働省）が出したため、医薬品として認可されませんでした。大手製薬メーカーはやむなくローヤルゼリーを回春剤かいしゅん、精力剤として売り出しましたが、日本での「ブーム」はほんの一、二年で終わってしまいました。

私がローヤルゼリーを求めて浅草国際通りを走っていたそのとき、日本ではすでにローヤルゼリーの存在は忘れられかけていました。だから浅草の二軒のハチミツ屋では「在庫なし」であつたわけです。

東海道線に飛び乗る

さて、浅草のハチミツ屋から養蜂家のリストをもらった私は、その足で近くの電話ボックスに駆け込み、片っ端から電話をかけました。

一軒目は「ない」。二軒目も「ない」。八軒目でようやく「三〇グラム入りが二本だけあります」との答えです。五十川いかがわ養蜂園というのがその屋号で、住所を見ると岐阜県安八郡あんぱち、揖斐川いびがわのすぐ近くです。値段は一本一万円とのことでした。

「二本とも買います。私、東京から電話をかけているのですが、今すぐ取りに行ってもよろしいですか」

「ええ、かまいませんよ」

当時としては、二万円は大金です。銀行で預金を下ろし、五十川氏とは大垣駅おおがきの待合室で落ち合うことにして、体ひとつで東海道線に飛び乗りました。

六時間ほどかけてやっと大垣駅に着くと、五十川氏はロイヤルゼリーのビンを二本、氷詰めにして用意してくれていました。一刻の時間を争う状況です。五十川氏とはろくに言葉も交わさなのまま、代金を支払ってすぐに上り列車に乗りました。

「とにかく早く帰りたい」

そんな思いでいっぱいでしたが、なにせ六時間の道のりです。そのうちふと、「ロイヤルゼリーって、どんなものなのだろう？」

と好奇心が湧わいて、包みをほどき、ビンのフタを開けてみました。初めて見るロイヤルゼリーは乳白色で、クリーム状でした。耳かきのような小さなスプーンが同梱どうこんされていたので、ひとすくいして舐なめてみました。

「まずいなあ」

というのが正直な感想です。酸味が強く、舌にぴりぴりと刺激を感じました。ミツバチが作ったものだと聞いていたので、甘いのかと思っていたのですが、まるで甘くありません。

ついにローヤルゼリーを

往復一二時間の列車移動を終え、浅草寺病院に戻ったのが、夜の一〇時半頃でした。主治医の大森先生はすでに帰宅されていましたが、幸いなことに婦長が当直でした。

「婦長さん、すみません。これはローヤルゼリーというものなのですが、どうしても父に与えたいんです。よろしいでしょうか」

「ローヤルゼリーって何ですか？」

「ミツバチが作ったものです。実はローヤルゼリーのお蔭かげで、瀕死ひんしのローマ法王が甦よみがえったという話があるので、試してみたいんです」

「大森先生も手の施しようがないと言っているくらいだから、ためしに使ってもいいでしょうね」

婦長はそう言ってくれましたが、父の口にはチューブが差し込まれていますし、昏睡状態ですから、そもそも経口投与は不可能です。ローマ法王ピオ一二世は皮下注射によってローヤルゼリーを投与されたのですが、その当時は私も婦長も知りません。

「これはお尻から入れるしかないわね」

婦長は言いました。浣腸器の先端にチューブをつなげ、肛門から挿入して直腸に入れることにしました。

「どれくらい入れますか？」

と訊かれたので、五グラムばかり入れてほしいとお願いしました。これは当てずっぽうの数です。ビン一本に三〇グラムが入っているのだから、一回あたりの使用量はだいたいそんなものだろうと思ったのです。

やがて婦長の手によって、ローヤルゼリーが入れられました。しばらく父のベッドのかたわらにいましたが、とりたてて変化は見えません。同じように朝夕二回、入れてもらうようにお願いして、その日は帰宅しました。

主治医の絶句

最初にローヤルゼリーを用いた翌々日のことです。

父が目を開きました。そうしてしきりに、手を動かそうとしています。

「お父さんの意識が戻った！」

すぐに婦長へ報告に行きましたが、「何かの間違いでしょう」と、取り合ってくれません。無理やり手を引くようにして病室に来てもらおうと、父は先ほどと同じように目を開け、しきり

と手を動かそうとしていました。酸素マスクやチューブが邪魔だから取ってほしい、というのが、どうやら父の意思のようです。

「えっ！」

婦長は驚いて、近くにいた看護婦に大森先生を呼びに行かせました。すぐに大森先生が飛んできました。

「山口さん、山口さん、聞こえるかい？ 聞こえたら私の手を強く握ってください」大森先生は父の耳もとに口を寄せ、大声で呼びかけました。すると父は、ぐっと拳こぶしに力を入れて、先生の手を握り返しました。

「信じられん……」

大森先生はしばし絶句したあと、婦長に訊ねました。

「その後何か変わったことはあったかね？」

「息子さんのご要望で、直腸からローヤルゼリーを入れました」

「ローヤルゼリー？」

「ミツバチが作るものだそうで、ローマ法王もローヤルゼリーで奇跡的回復をされたというお話です。息子さんは今後もずっと入れてほしいとおっしゃっていますが、よろしいでしょうか」

「それはかまわんよ。しかし……信じられんなあ」

しきりに首をひねる大森先生に、母が声をかけました。

「あの、先生。主人はどうも酸素マスクやチューブを取ってほしいと訴えているようなんです。取っていただくことはできますでしょうか」

「よし、わかった。取ってみよう」

先生と看護婦たちの手で、酸素マスクが外され、何本かのチューブが慎重に抜き取られました。すると父は何か言い出しました。チューブが入っていたために声帯に傷がつき、かすれた声しか出せません。家族全員がいつせいに父の口に耳を寄せました。

「腹、減った」

なんと父はそう言ったのです。

ロウソクの火

とはいえ、これは父が意識を取り戻した、ということでした。肝臓ガンが治ったわけではありません。

「みなさん、ちよつと……」

大森先生は手招きして、私たち家族を廊下に連れ出しました。

「山口さんが意識を回復したのは、本当によかったと思います。ただ、死期が迫っている人には時折こういうことがあります。ちよつどロウソクの火が消える間際にパツと激しく燃えるよ

うなものです。山口さんは依然として危険な状況です。安心はしないでいてください」

一方の私は、再び岐阜の五十川氏に連絡を取りました。二本買ったロイヤルゼリーが早くもなくなりかけていたからです。父が末期の肝臓ガンだと宣告されていること、しかしロイヤルゼリーを投与したら回復しつつあることを話し、至急追加で買わせてほしいと頼みました。すると五十川氏はこう言いました。

「私のところだけでは間に合わないので、仲間の養蜂家にも声をかけて何とか集めてみますが、それでも三〇グラム入りで五本が限界です」

ロイヤルゼリーが簡単には採取できないものだと、そのとき私は初めて知りました。五十川氏はこうも言いました。

「うちは天然王台からロイヤルゼリーを集めるので、ハチが王台を作るまで待たないといけないのですよ」

王台というのは女王バチの幼虫を育てるための、いわば特製の「ゆりかご」で、ここにミツバチたちはせっせとロイヤルゼリーを溜めていきます。天然王台とはミツバチ自身が作った王台で、これとは別に人工王台というプラスチック製の王台からロイヤルゼリーを採取する方法もあります。むろんそのときの私は、そんなことを知る由よしもありませんでしたから、五十川氏が何を言っているのか理解できませんでした。しかしともかく、追加注文に応じてもらえて、胸をなでおろしました。

大垣まで取りに来てもらうのは大変なので郵送する、値段も一本八〇〇〇円でいい、このことで、懐かひが寒ひやかった私には実に助かる話でした。

「不思議としか言いようがない」

「腹が減った」

父のその言葉に、まず薄い重湯おもゆを食べさせました。スプーン二、三杯ほどだったでしょうか。嘔吐おうとなどがあつては大変ですから、しばらく慎重に様子を見ましたが、異常は起こりません。父は満足気に眠りました。

その翌日も父は「腹が減った」と言いましたので、前日のものよりはやや濃くした重湯を食べさせました。量も前日より多めです。

やがて重湯がおかゆに替わり、おかゆのほかに薄く切った豆腐の入った味噌汁みそしるなども食べられるようになりました。

食欲のほかに目立ったのは、尿の量です。入院直後は一日五〇〇ccも出ていなかった尿が、二〇〇cc、三〇〇cc、五〇〇cc……と日に日に増えていき、腹水でパンパンになっていたお腹が、少しずつ平らになっていきました。

尿がしっかり出るようになるのと並行して、黄疸症状が治まっていきました。濃い黄色が少しずつ薄くなつていったのです。

寝たきりだった父は、やがてベッドの上に座ることが多くなり、便を人に取られるのを嫌がって、簡易便器を使うようになりました。簡易便器を使う際は、壁づたいに歩きました。点滴の器具を引きながら廊下を散歩することが許されたのが入院四〇日目。この頃には黄疸はすっかり治って、肌には赤味がさしていました。食事も七分粥がゆに梅干、白身魚の煮つけといったメニューから、白米に刺身といった「普通の食事」に替わりました。

「私は四〇年医者をやっているけれど、こんなケースは見たこともなければ、聞いたこともありませんよ」

入院して三カ月目になった折、病室にやって来た大森先生は言いました。

「血液のデータは明らかに良くなっています。尿もよく出ているし、腹水もなくなつて、黄疸もなくなつた。良くなるはずがないのに、良くなっているのだから、不思議としか言いようがない。山口さんには痛い思いをさせてしまおうが、ここは直接、腹腔鏡で検査をさせてもらいたい」

ほどなく最終検査が行なわれたところ、何と父のガンは消えていて、転移もなし、肝硬変も良くなっている——との診断が出ました。

燃えるような希望

「これは奇跡ですよ、山口さん。これなら今週末にでも退院してかまいません。もちろん通院

は必要ですが、本当に良かった、おめでとう！」

大森先生の言葉に、家族一同、しみじみと泣きました。余命三ヶ月と宣告されたその四ヶ月後、父はついに元気な姿で退院したのです。退院から半年が過ぎると、持ち前の職人魂が甦つて、以前と同じように活動しはじめました。

これはつまり、ロイヤルゼリーが起こした奇跡だと、そのとき私は確信しました。父が危篤状態に陥った時点で、医学的処置は万策尽きていました。新たに施したことといえば、ロイヤルゼリーの投与だけです。

ロイヤルゼリーによってローマ法王という世界中に存在を知られた人が、危篤状態から甦っているのは、世界的に有名です。しかし、にもかかわらず、日本ではロイヤルゼリーの存在はほとんど知られていませんでした。ハチミツ屋に置いていないどころか、養蜂家ですら「ロイヤルゼリーは採っていない」というところが大半だったのです。これは見方を変えれば、そこに大きなビジネスチャンスがある、ということなのです。

養蜂家のリストを渡してくれた浅草のハチミツ屋、ロイヤルゼリーをただちに用意してくれた五十川氏、ロイヤルゼリーという医学的根拠のないものの投与を認めてくださった大森先生。みなさんに心から感謝すると同時に、私はこの不思議な巡り合わせに、燃えるような希望を抱きました。

「よし、これからはロイヤルゼリーの普及活動をするぞ！　ロイヤルゼリーで救われる人はた

くさんいるはずだ」

そう決意したのです。

一九六六年の秋、私が二三歳のときのことでした。

第二章 父母の教え

山口家のルーツ

前章で書いたとおり、父の奇跡を目のあたりにした私は、誰の後ろ盾もなく、文字どおり徒手空拳でロイヤルゼリーの行商を始めることになるのですが、ここでいったん時計の針を大きく巻き戻し、私の生まれ、育ちからお話をしてみたいと思います。

すいぶん遠回りをするのだな——。そう思う方もいらっしゃるでしょう。しかし、私の行動指針、商売に対する考え方、商品への想いといったものはすべて、少年時代から青年時代に見たこと、聞いたこと、感じたことが礎いしずえになっています。ですからやはり、「最初」からお話しするのが一番だと思っております。

一九四三年三月、私は東京・浅草蔵前くらまえに生まれました。五人きょうだいの末っ子です。姉が三人、兄が一人いました。

一九四三年といえは戦時中で、アメリカ軍による東京空襲が激しさを増していた頃です。私は生まれてほどなく、母と三番目の姉との三人で、神奈川県箱根町に疎開しました。

箱根は山口家のルーツとも呼べる所です。わが家の先祖は小田原藩士で、箱根関所の伴頭ばんとうを代々務めていました。伴頭というのは、関所の最高責任者です。私から数えて一七代前のご先祖さまからずっと、その職を引き継いできたと聞いています。

曾祖父そうそふの代よのとき、明治維新を迎えました。上から下まで世の中が大きく変わって、小田原藩はおろか武士という存在すらなくなってしまう、関所は単なる「過去の遺物」と化しました。地位を失った曾祖父は、木工挽物職人もっこうひきものに転じます。木工挽物というのは木材をろくろで挽いて作ったお椀、お盆、鉢などの製品です。

箱根といえは寄木細工よせぎが有名ですが、挽物細工も戦国時代の頃から盛んで、小田原から箱根へ至る街道筋には多くの職人が暮らしていたそうです。

そうした職人の世界へ、曾祖父は飛び込んでいったわけです。おそらく右も左もわからないままの転身だったでしょう。身を切られるような苦労があったことは想像に難くありません。ただ、箱根関所の責任者だった元の地位から宮内省みやうちしやう（現・宮内庁）に一日置かれ、明治天皇が箱根離宮はこね（函根離宮）へお見えになる際は、いつも必ず曾祖父がご案内役を仰せつかったそうです。

曾祖父から祖父へ、祖父から父へと、木工挽物職人は三代にわたって引き継がれました。東京に出たのは祖父の代からですが、なにしろ箱根は一五代にわたって山口家のあった土地ですから親類縁者も多く、そのツテを頼って母と姉、そして私は箱根に疎開したのでした。

バス停で待つ母

一九四五年になっていよいよ戦局が悪化してくると、東京は連日のようにアメリカ軍の空襲に遭うようになり、兄が箱根へ疎開することになりました。兄は当初、学童疎開で栃木へ行っていたのですが、疎開先で体を悪くして東京へ戻されていたのです。

父と母は連絡を取り合いながら疎開の準備を進め、兄の荷物が箱根に届き、切符の手配もすでに済んで、あとは本人が来るだけ——ということになりました。しかし、箱根に来る直前の三月一〇日、兄は東京大空襲に遭ってしまいました。

父は当時、警防団の団長をしていました。警防団というのは、今日で言う消防団のことです。三月一〇日の大空襲の際も、父は消火活動や地域住民の避難誘導などをしていて最後まで火事場に踏みとどまり、兄と姉二人を先に避難させました。

持ち場周辺の猛火がいよいよ激しくなつて、父は浅草から厩橋を渡つて両国方面に避難します。その際、大怪我をした瀕死の人に「助けてくれ」と足を掴まれて動けなくなり、大火傷を負いました。

夜が明けて子どもたちを探しましたが、見つかりません。幾日も幾日も探し続けたが、やはり見つかりません。

生き残った知り合いに聞いたところでは、兄たちは蔵前橋を渡つて本所方面に逃げたという話でした。しかし本所周辺は四方を火に囲まれ、東京大空襲で最も悲惨な被害を受けたエリア

の一つです。

むろんのこと自宅は跡形もなく焼けてしまっていました。父はやむなく、私たちが暮らす箱根へ火傷だらけの体でやって来ました。

父に事情を聞かされた母はどうなったか。私はそのとき二歳ですから、記憶にはありません。しかし当時七歳だった三番目の姉からそのときの様子を聞いています。

母は毎日、住まいの近くにあるバス停へ行き、子どもたちを待ちました。「次のバスに乗って帰ってくるのではないか」「次のバスに乗って帰ってくるのではないか」と、終日バスを待ち続けたのです。気が狂^ふれてしまったのではないかと周囲の人たちは心配したそうです。実際、精神状態がおかしくなってしまうていたのでしよう。完全に元に戻るまでは二年近くの歳月を要したそうです。

兄と姉二人は、ついに帰ることはありませんでした。

恩賜公園への「遠足」で学んだこと

戦争が終わっても、私たち一家は箱根にとどまりました。浅草の家は焼けてしまつて、東京は一面の焼野原です。戻ったところでどうにもなりません。父はのちに名人と称されるほど腕の確かな職人でしたから、木工業が盛んな箱根で暮らしを立てていく、という選択をしたのです。

とはいえ、物資欠乏の時代です。箱根には田畑になるような土地はありませんから、農作物は麓かもとの三島みしままで買いに行かなければなりませんでした。私と姉は、その手伝いをよくしました。朝、母に連れられて家を出て、山道を下って三島まで行きます。三島で農家から作物をかうと、リュックに目一杯詰め、今度は山道を登って箱根に帰るのです。

私も姉も重いリュックを背負いました。日が暮れるまでに帰らなければいけませんから、のんびりとはしていません。三島からの帰り道がつかったのは、今もよく覚えています。初夏のある日のことでした。

母は三島から買って帰ったサツマイモを、釜で蒸ふかしました。二〇個ほども蒸かしたでしょうか。母はそれを厚めに斜め切りにしてゴマ塩を振りかけ、山型に重ね、風呂敷で包みました。そうして髪を整え、珍めづしく唇くちびるに紅をさしました。私たち姉弟は、よそ行きの服を着せられました。

「お母さん、どこへ行くの？」

と聞くと、

「箱根離宮よ」

との答え。

箱根離宮は戦後、神奈川県に下賜かされ、その頃は恩賜箱根公園と名を変えて一般に開放されてきました。母は昔ながらの呼び方で「箱根離宮」と言ったわけですが、私からすればそこは

きれいな公園です。その日は日曜日でしたから、幼い私は「遠足に行くんだ！」と思つて嬉しうれくなりしました。

ところが母は恩賜箱根公園に着くと、ゴザを敷き、小台を出して、そこに白布をかぶせました。大きなザルを置きその中にきれいにイモを並べました。

「さあ、いらつしやいませ、三島の栗イモですよ！ 召し上がってみませんか！」
母はサツマイモを売り始めたのです。

「身なりを整え、話を聞く」

新緑の恩賜箱根公園は、大勢の人たちで賑にぎわっていました。たちまち人垣が出来て、サツマイモは飛ぶように売れました。

家を出るとき、姉はほうじ茶の入った大きなヤカンを持たされました。自分たちで飲むためではありません。サツマイモを買ってくれた人へのサービスのため、母はほうじ茶を用意したのです。なるほどイモを食べれば胸がつまることもあります。ほうじ茶のサービスはお客さんに喜ばれ、サツマイモは一時間もしないうちに完売しました。

それからというもの、晴れた日曜日には恩賜箱根公園でサツマイモを売ることが母と私たち姉弟の仕事になりました。出かける際、母はいつも必ず髪を整え、薄化粧をし、姉と私によるよそ行きの服を着せました。

母はとても器用な人で、父の服をほどいて染め直し、半ズボンを作ってくれたり、古くなつたセーターをほどいてストライプのベストを編んでくれたりしました。私はいつもその半ズボンを穿^はき、ベストを着て、これも母が手作りした烏打帽をかぶって、恩賜箱根公園のサツマイモ売りに行つたのです。何度も言うように物資欠乏の時代ですから、いつもたちまち完売でした。

しかし、それにしても――。

あるとき私は不思議に思いました。私たちはなぜ商売に出かけるときよそ行きの服を着るのだろう。母はなぜ、いつもはしない紅を唇にさすのだろう。そう思つたのです。

幾度も出かけていくうちに、理由がはつきりわかりました。答えは「身なりを整えたほうがよく売れるから」です。

当時、恩賜箱根公園には母のほかにもイモ売りをする人がいました。スイトンや味噌汁を売る人もいた。しかしその誰もが、汚れた服を着ていました。もちろん化粧などしている人はいません。ツメが黒く汚れている人もいました。

母の売るサツマイモはいつも真っ先に売り切れましたが、それが一体なぜなのか、理由は言うまでもないでしょう。

母はまた、お客さんの話をよく聞いてあげました。戦地に行つたまま戻らない兄の無事を祈願するため箱根神社に参詣してきた、という人の話を涙ながらに聞いていたのを、私は今でも

ありありと覚えています。

まず身なりを整えること。人の話をよく聞くこと。これはローヤルゼリー販売を始めるとき、真つ先に心がけたことです。具体的に何をしたのか、そのお話は後回しにしたいと思いますが、恩賜箱根公園での母の姿から学んだことは、七二歳になった今も深く私の胸に刻み込まれています。

生まれて初めての徹夜

母・初子はつこは一九〇七年（明治四〇年）、和歌山県新宮市しんぐうに生まれました。生家は貧しく、きょうだいは九人もいましたが、母だけが女学校へ進学し、卒業後は新宮市の西村家へ奉公に上がりました。

この西村家は和歌山県から奈良県にかけて、広大な山林を代々所有・管理している一族で、世間からは「山林王」とも言われていたそうです。

その若き当主であったのが、後に歌人の与謝野晶子よさのあきこらとともに東京で文化学院を創立したことで有名な西村伊作先生いさくでした。

西村先生は若い頃（一九〇九年＝明治四二年）に欧米を周遊した経験もある、たいへんな文
化人、知識人でもありました。与謝野晶子、画家の石井柏亭はくてい、彫刻家の保田龍門やすだりゅうもん、陶芸家の富本憲吉もとけんきちといった、当代一流の芸術家を新宮に招いては創作活動を援助していたことでも知られ

ています。

西村家で母は当時珍しい西洋料理から中華料理、本格的和食、裁縫などの家事全般、和洋の作法、華道や茶道から着付けに至るまでを教えられ、身につけました。当時の奉公は花嫁修業の側面もあつたのですが、父に嫁ぐのが決まった頃、母は西村家で女中頭をしていたそうです。おそらく万事の手ぎわが水際立っていたのでしよう。

そういう母でしたから、躰しつけは実に厳しいものでした。とりわけ食事の作法については際立っていました。

たとえば背筋をきちんと伸ばさずにいたり、あるいは茶碗の持ち方が悪かったりすると、二尺のモノサシで「ばちん」と腕を叩たたかれたものです。時には火箸ひばしで叩かれることもありましたが、むろん猛烈に痛い。叩かれたところは、みるみる青アザになります。しかしそのような痛い目に遭うからこそ覚えも早く、しつかり身につきます。後年、どこで誰と食事をするときも、私は恥ずかしい思いをしたことはありません。

これは私が小学校に上がったあとの話なのですが、その頃私は、母に「ぎつちよ」の矯正を受けていました。左利きを、右利きに変える。そのために母は私の左手を縛しばりました。そうして皿に小豆を入れ、それを塗り箸でつまむ練習をさせられました。失敗すると、例のモノサシです。

同じように、勉強のときには右手に鉛筆を持たされました。使い慣れない右手で箸を使い、

文字を書くのはたいへん苦しいことでしたが、普段はとてもやさしい母が、鬼とも思えるような厳しさで私に接するのでした。

そんなある日のことです。学校で習字の宿題が出ました。そのとき私は右手でまともに字を書きませんでした。母はいつもと同じように私の左手を縛り、右手に筆を持たせました。

当然うまく書けません。新聞紙に何度も何度も書く。でも書けない。夕方五時から始めて、夕食もそこそこに習字に励みはげましたが、時計の針が九時を指し、一〇時を指し、午前〇時を指してもまだ書けません。

午前三時、母は夜食に茶粥ちやがゆを作ってくれました。それを食べてまた書きました。

ようやく文字らしくなったのは午前五時頃。母は私の字を見て、書棚から一冊の本を出しました。見ると、『習字の習い』という本です。

抗議の早退

『習字の習い』には「いろはにほへと」と模範の文字が印刷されていました。母はその本の上に半紙を置き、なぞって書いてみるよう、私に言いました。

「最初からこの方法でやったらどんなに楽だったか……」

そう思いましたが、むろん口には出しません。

母の言うとおり、手本の文字を何度もなぞりました。そしてついに、手本をなぞらなくても



母と私(小学校1年生のころ)

人並み以上の文字が書けるようになりました。実に一二時間もの時間をかけ、私は宿題をやり遂げたのです。

「えらい、えらい、本当によく頑張りました」

母は涙を流して喜んでくれました。

朝日はすでに昇っています。小学生の身に徹夜はこたえました。母と二人で努力したこと、立派な成果が出たことに興奮し、意気揚々と学校へ向かいました。

ところが、学校ではまったく予想外の結果が待っていました。担任の先生に、激しく叱られてしまったのです。

「これは山口君の書いた字ではないわね。どうして自分で書いてこないのですか。先生は正しいことは大嫌いです」

「違います、これは僕が自分で書いたんです」

必死に訴えましたが、聞いてもらえません。私は「ずるいこと」をした罰として、廊下に立たされました。しかし、あまりの悔しさ、悲しさに廊下に立っていることが嫌になり、家に帰ってしまいました。

「どうしたの？ 気分でも悪くなったの？」

ランドセルも持たずに帰った私を見て、母は驚きました。泣きながら一部始終を説明すると、母は言いました。

「これから学校へ戻りなさい。お母さんも一緒に行きます」

毅然たる母の対応

学校に戻ると、まだ授業は続いていました。母は教室に静かに入り、「なぜ息子が『ずるいこと』をしたと思ったのか」と先生に訊ねました。腹は立っていたのでしようが、物言いはおだやかです。

「山口君は左利きなのに、字は右手で書いてあります。字そのものも普段とは違います。私は書道の有段者ですから、一目見ればわかります」

先生の言い分を聞いてから、母は口を開きました。

「教師として生徒に愛情を持っていらっしやるのなら、何より真っ先に、なぜこんなに上手に書けたのか、訊くべきではありませんか。左利きの息子が徹夜で習字の練習をして、右手で上手に書けるようになったのです。私が証人です」

先生はなお納得しかねる様子だったので、母はついに私に墨を磨^すらせ、筆を持たせ、半紙に字を書かせました。

上手に書き上げた字を見て、先生は震えだしました。

「申し訳ありません。私がすべて悪うございました。山口君を傷つけてしまったことは取り返しがつきません。どうぞ懲罰委員会に訴えてください。教師として責任を取ります」

しかし母は追い打ちをかけませんでした。それどころか先生を慰めたのです。

「誰でも間違いはあります。今回このようなことがあって、息子は右手書きに自信を持ったと思います。今日の出来事はお互いに教訓として胸にとどめておきましょう」

私はいい気持ちになりました。お母さんに悔しさを晴らしてもらったと、そう思った。ところが母は、ここで私を叱ったのです。

「疑いを持たれたら、きちんと自分でご説明なさい。説明して納得していただけなかったら、実際に書いて見てもらいなさい。それくらいのができないでどうするのですか」

返す言葉もありません。母はなおも言いました。

「無断で家に帰ったことを先生に謝りなさい」

分岐点

こうして母は怒りをあらわにすることをせず、先生の面子をつぶすこともせず、息子たる私には「疑いを持たれたら正しい方法でそれを晴らすこと」「動機が何であれルールは守らなければいけないこと」を教え諭したのでした。

この一件以来、私は習字の時間がむしろ好きになりました。

中学校に上がってからは書道の先生に行書、草書を教わり、ますますのめり込みました。あるとき色紙に、

「ゆう雲のひかりの中にちらばりて　またよりてうしは帰らむとせず」
という歌を草書に仕上げて書きました。先生に見せたところ、すばらしいと絶賛され、その色紙は校長室に掲げかかられました。

これは第四章で詳しくお話したいと思いますが、ローヤルゼリーの行商を始めた私は、お客様への礼状を、必ず毛筆でしたためました。新しいお客様を紹介してくださった方には、紹介して下さったことへのお礼、その後の経過報告なども、やはり毛筆でしたためて差し出しました。

行商をやめ、ローヤルゼリー販売の会社を立ち上げたあと、私は人脈を広げてゆくため、いつも必ず、お世話になったみなさんへ毛筆で礼状をしたためました。いつも必ず、そしてそのことによつて、自分の実力をはるかに超えた、雲の上にいるような人たちが私を信頼してくださるようになったのです。

右手で文字を書いたのを「ずるいこと」と叱られ、ただふてくされて廊下に立っていたなら、私は習字が嫌いになったでしょう。教師という存在を嫌悪し、学校という場所を嫌悪し、挙句、不良学生になってしまったかもしれませぬ。

人生という道は、ほんのわずかなきつかけで大きく変わっていくのが常です。教師を嫌いにならず、学校を嫌いにならず、書道という大きな楽しみを与えてくれた母には、今でも心から感謝しています。

一通の手紙

さて、ここでまた時計の針を何年か戻しましょう。

一九四八年、私が五歳だったある日のことです。

箱根に暮らしていた私たち一家のもとに、一通の手紙が届きました。差出人は父の古い友人。手紙にはこうありました。

「山口さんが箱根へ行ってしまったから三年が過ぎました。みんな山口さんが浅草に戻ってくるのを心待ちにしています。つきましては、昔の仲間たちで資材を持ち寄り、山口さんの元の住所に新しく家を建てました。以前と比べれば三分の一くらいの広さですが、本建築です。壁も聚楽じゅらく（きめ細かな上質の砂状仕上げの土壁）で仕上げました。家族四人、十分に暮らしていける家です。いつでも戻ってこられるように、日々掃除や草刈りをしています。どうですか。浅草に戻ってきませんか」

戦争が終わり、あちこちに散らばっていた職人仲間、近所の住人のみなさんが、一人また一人と浅草に戻ってきました。やがて、

「山口さんはどうしているんだ？」

という話になり、箱根に暮らす父のもとに消息を訊ねる手紙が来しました。しかし父は、返信を出さなかったようです。

当時の父にとって浅草は、三人の子どもたちを戦火で失った忌まわしい土地です。そこへ戻

る気持ちには、どうしてもなれなかったのでしょう。

しかし、家を一軒、建ててもらったというのなら、少なくとも返事をしないわけにはいきません。

一九四八年といえ、東京はまだ一面の焼野原です。誰もが自分と家族が食べていくのに精一杯でした。そんな時代に、木材屋さんは木材を、左官屋さんは塗り土を、畳屋さんは畳を、ふすま屋さんはふすまを持ち寄って、無償で家を建ててくれたのです。

「みなさんがこうまでしてくださったんです。お父さん、東京へ帰りましょう。子どもたちのためにも浅草で出直しましょう」

母の説得に、父はようやく重い腰を上げました。こうして私たち一家は箱根から浅草へと転居したのです。

「安いモノが欲しかったらよそへ行け」

浅草の新居は、立派な家でした。

門があり、塀があり、小さいながらも庭もある。周りに暮らしている人たちの住まいはどれもバラック小屋でしたから、焼野原の中で際立っていました。

父の仲間たちが無償で家を建ててくれたのには、もちろん理由があります。父は若い時分から困っている人を捨てておけない性格で、たとえばお金に困っている人がいたら、ポンとなけ

なしのお金をあげてしまふ。借金証文など取りません。病院に行けば下足番げそくばんに心付けをわたし、料理屋に行けば仲居に祝儀をわたしました。氏子うじことしての寄付が多かったから、お祭りのときは山車だしや神輿みこしがわが家の前に停まったものです。

先にお話ししたように、警防団の団長を務めるなど、父は人の面倒もよく見ました。わが家には一番多いときで一〇人から一五人の弟子が住み込みでいましたが、父は弟子たちには「腕を磨みがくことだけ考えろ」と説いて、家事の手伝いをいっさいさせませんでした。これはその時代の職人としては、きわめて珍しいことだと思います。昔は住み込みの弟子といえは、師匠の家のことは何でも手伝うのが当たり前です。

と、そのように言えば父がたいへんな人徳者であったように思われるかもしれませんが、職人としての生き方は頑固一徹そのものでした。

まず安物の注文を受けません。「安いモノが欲しかったらよそへ行け」と、こうです。材料は徹底して「本物」にこだわりました。長年使っても絶対に歪ゆがみや狂いの出ない良材のみ使うことを信念としていたのです。

ですからたとえば、「お椀をいくつ、急ぎで作ってほしい」といった注文が来ても、「材料を探すのに時間がかかるから、急ぎの注文なんてもものには応こたえられない」と、お客さんを帰してしまったりする。「見積書を出してくれ」と言われようものなら「そんなもん、作ってみるまでわかるか」。

これもやはり「本物」にこだわるがゆえのことです。しかし、お客さんからすれば「客を何だと思っているのか」となって当然でしょう。

父は目下の者にはたいへんにやさしいのですが、どこぞの支店長であるとか副社長といった肩書のお客さんが来ると、どちらが得意先かわからないほど居丈高いたけだかになってしまいう人でした。詫わびなければならぬ場面で、怒鳴どなってしまったりもする。

そういうときお客さんを取りなしたのは母でした。心を込めて理路整然と説明し、あるいは言葉を尽くしてお詫わびをし、気を悪くしたお客さん、クレームを言いに来たお客さんに、どうにか納得して帰ってもらうのです。「初子さんは弁が立つから区会議員に立候補したら通るかもしれないね」などと近所のみなさんは冗談を言っていました。父の本物志向は、母によって支えられていたと言っても過言ではありません。

関東一の名人

父の本物志向は、仕事に対してだけではありませんでした。

着物でも洋服でも「安物を一〇着揃えるくらいなら、本物を一着持っていればいい」という考えで、下駄は桐の征目まさめの特注品、汽車に乗るなら一等車、車に乗るなら黒塗りのハイヤーです。懐にはいつも、BOVETボヴェ（スイスの最高級メーカー）のプラチナ懐中時計を入れていました。

食事をするのも名店ばかりです。時に父はそうしたお店に私を連れて行きました。そのとき父が決まって話したのは、「この店はなぜ一流なのか」ということでした。

料理人はどこで修業したのか。料理のだしは、どこで採れた何から取ったか。野菜や魚はどこから仕入れているか。この器はどういうものか。内装を手がけた大工や左官は誰それで、柱はどこの杉で、天井の板はどこの桤無垢まさむくで、壁の仕上げはどうやったものか——ということを教えてくれるのです。

「お前も大人になったら、こういう店の上得意になるんだな」
そんなこともよく言われました。

あるとき私は、父の知人からこんなことを言われました。

「君のお父さんは、木工挽物では関東一の名人上手なんだよ」

実際、父の作品は年月が経っても狂いが生まれません。やはり木を見抜く力があつたのでしよう。値段は張るし、時間もかかるが、さすがに山口さんの作品にはそれだけの価値がある——というお得意先の声も幾度となく耳にしました。そんな父が衣食にまで一流を求めたのは、自分の仕事をさらなる高みへ導くための試みだったのかもしれない。

ローヤルゼリーを取り扱うことになった後年、私は父の本物志向を思わぬ形で受け継いでいることに気付かされました。一流の名店でおいしいものを食べさせてもらっているそのときは、ただ嬉しいばかりです。父が身につけている着物や洋服を見たそのときは、ただ「恰好かっこういいな

あ」と感心するばかりでした。しかし知らず知らずのうちに、父の精神は私の中にしみ込んでいたのです。

小遣い稼ぎは「銅拾い」

ところで、山口家には一つ、変わった教育方針がありました。

子どもに小遣いをあげない。それがその「変わった教育方針」です。

ここまでお話ししましたように、父はケチではありません。むしろその逆で、下足番や仲居にも心付けをあげる人でした。ところが自分の子どもに限っては、ただの一円も小遣いをくれないのです。

小学校に上がる頃になると、友達はみんな、十円玉や五円玉を握りしめて駄菓子屋や紙芝居へ行きます。私はそういったものには興味がありませんでしたが、文房具や本、レコードを手に入れるための小遣いも、もらえませんでした。

そこで仕方なく、銅拾いを始めることにしました。

私が小学校に上がったのは一九四九年のことで、戦争が終わってから四年の歳月が過ぎていきます。しかし東京にはまだ広大な焼野原が広がっていました。浅草蔵前にあった自宅からは上野の山が近くに見えましたし、銀座の焼けたビル群も遠望できました。

そんな一面の焼野原には、銅や鉄のクズがたくさん落ちていました。大人たちがそれを拾い、

専門の業者へ持ち込んでお金に換えていることを知って、私は「自分もやってみよう」と思いました。鉄よりも銅のほうが高く売れるので、もっぱら銅拾いです。

業者へ持ち込むと、相手が子どもだと見て、相場の四分の一程度でしか引き取ってくれませんが。しかしそれでも、文房具を買うくらいなら十分な額になります。

それからまた、お正月には親類縁者からお年玉をもらえます。私はそれを竹筒で作った貯金箱に入れました。割らないと、中のお金を取り出すことのできない貯金箱です。

あるとき、どうしてもグローブが欲しくなつて、竹筒を割つてお金を出しました。細かい金額は忘れましたが、竹筒から出てきたお金は、グローブ代の半分ほどでした。すると母は、何も言わずに残りの半分を出してくれました。どうしても欲しいレコードを買おうとしたときも、母が足りない分を出してくれました。しかしそれは竹筒を割るといふ特別なときだけです。普段使うものは、自分で稼いだお金で買っていたのです。

子どもの身にふさわしくない大金

話は少し飛びますが、私は幼い頃から歌が得意でした。友達や先生によく褒められましたし、学芸会ではいつも主役を任されました。

小学校五年生のとき、日本ビクターでソロシンガーのオーディションを催している^{もよお}と聞き、応募してみました。受ければ銅拾いよりも割のいいアルバイトになると思ったのがその動機で

す。

結果は合格。週二回、ラジオに出演することになりました。すると驚いたことに、出演料は一回一五〇〇円でした。月に八回出演すると一万二〇〇〇円が入る計算ですが、サラリーマンの初任給が一万円を切っていた頃の話です。むろんそんな大金を子どもの手^{ゆた}に委ねる親はいません。ラジオ出演で稼いだお金は、母の手で貯金に回され、私が高校に入った折、入学金や授業料、教科書代などに変わりました。

ラジオ出演を始めてからほどなく、私はNBKという日活系^{につかつ}の劇団に入り、映画にも出演するようになってきました。「収入」はますます増えました。ところが中学に上がった頃から、声変わりして、声が出なくなってしまうた。私はもともとボーイソプラノだったので、まず高音が出なくなり、やがて声がつぶれるようになったのです。

やむなくビクターも劇団も辞めました。最後に出演した映画は三橋達也^{みはしたつや}さん主演の『夏の嵐』という作品で、私は作中、横浜山下町^{やましたちやう}のチャペルセンターで賛美歌を歌っています。

とはいえ、私は芸能の世界から身を引いたことを、さして残念には思いませんでした。それがなぜなのか、うまく言葉にはできないのですが、芸能界という場所がなんとなく好きになれなかったのです。

私が一番に憧れていたのは父でした。「生き神様」「生き仏様」と言われ、親分肌で気風^{きつぷ}がよく、腕も名人上手と呼ばれる、父のような職人こそが一番恰好いと心底思っていた。その気

持ちを父にぶつけたのは、高校三年の秋のことです。そのときの父の答えは、私がまったく予想していない、きわめて意外なものでしたが、これについては次章で詳しくお話しすることにしてしましよう。

人は人に感じ、人を呼ぶ
山口喜久二・著

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定価：1,600円（本体）＋税
発売日：2015年12月15日
ISBN：978-4-7976-7310-4 C0034

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)